

## 6-4 ウエペケレ「チシナオツ イタク ハウエ アヌ」解説

語り手：貝澤とうるしの  
聞き手・解説：萱野茂

萱野：この uepeker [散文説話] は cisinaot [包んだ遺体]

貝澤：cisinaot

萱野：cisinaot?

貝澤：cisinaot ていうの。toma [ござ] あれ……

萱野：うん、分かる。cisinaot i=koramukor [棺桶が私に相談した] でもない…  
…

貝澤：cisinaot itak hawe a=nu... [棺桶のいう言葉を私は聞いた……]

萱野：うん。cisinaot itak hawe a=nu だな。

貝澤：ot onnay un itak hawe... [遺体を包むござの中から言った言葉...] あの  
わかる？ XXX?

萱野：私は何不自由なく暮らしておった一人の男でありました。ある時に、これ  
は kucacise [狩小屋] にか？ 聞いたの。

貝澤：うん。

萱野：siromacise or\_ ta... [立派な家に]

貝澤：siromacise or\_ ta でなく……

萱野：kucacise だな？

貝澤：途中 ne kucacise or\_ ta, hanke kuca or\_ ta rewsian akusu a=nu. i=or un ek wa [狩小屋に、近い狩小屋に泊まった時間いた。狩場にやって来て]

萱野：うーん。私は何不自由なく暮らしておった一人の男でありました。ある時に山へまだ獵に行くのにずっと家から出かけて行って、途中にある kucacise というその狩り小屋へ入って泊まった。それも遠い方ではなく、近い方の狩り小屋へ行って泊まって、すっかり暗くなって火を焚いて一人で座っておったら、遠くの方から何かゴトン、ゴトンというような、人間が歩いた音とはまだ違う何か荷物を投げてはまだ後へ来るというような音がずっと聞こえてる。

それがだんだん、だんだん近くなって自分の入ってるその kucacise のところまで来たら、kucacise の戸の、kucacise ちゅうのは狩り小屋ですが、その狩り小屋のそこへかけてある、こう toma といいますが、ごぎのような物をずっとまくって、そのそこへ出てきたものを見ればそれは cisinaot と言って aynu が死んだら toma に包むんですが、その toma というのごぎですが、そのごぎに包んだ死体、ごぎで出来た棺桶ですね、その棺桶がそこへすつとき、その中から声があつて聞くとそれは女の声。しかも私の一番の友達の名の人がつい最近妻を亡くした、その女の声で言うのには、「いやー、しばらくでしたね。私はあんたへ今日はお願いがあつて来たんですよ。実は私は病気で死んで、その後に私の夫であつたあなたの友達のあの男が、すぐにお嫁をもらってしまったので、本当に情けない、残念だ。何とかその男の命をとって、別なところで夫にしたいと思つて毎晩狙いに行つても、まったくその殺すことが出来ない。その、殺せない一番の理由はその夫が生前、いや前々からその宝物として持つておつたところの、その cup noka oma kosonte というのは、太陽の絵を描いた、形を描いた着物があつた。その着物を、その太陽の形の描いたところを表にして、ま、アイヌ語で kakenca というのはその夫婦の寝室の仕切りのところに toma というごぎなんか掛けて仕切つてある、その側の衣文掛けのような物へ掛けて置いてあるので、夜行つてもそれがキラリキラリ光つてもうビカビカ光つて近寄ることが出来ないんだよ。それで全然行くことが出来なくて命をとることが出来ない。それであなたにお願ひがあるんだが、今から行つてその着物をあなたが買い受けてはくれませんか」と。

そうして、「その着物がなくなれば、私は近寄ることが出来るので、命

をすぐにとります。もし、私の言う事をあなたが聞かずに、今言ったようなその着物を買って取ってくれなければ、殺すのはあんたを殺しますから、いいですか、お願いはこれだけです」と、言ってその **cisinaot** 棺桶はまたカタンカタン、パタリパタリと音をしながらどっかへ去ってしまった。

それを聞いてもうすっかり驚いてしまって、まあどうしようかと思ったんだけど、自分がしなければ、行ってその着物を買って受けなければ代わりに自分を殺すというんだから、それをしない訳にもいかないし、どうにもならん。考えて次の朝になってから自分が死ぬよりはと行ってその友達の男のそこへ出かけて行った。

そして、「長いお付き合いだったしあなたの持つてる宝物で私が欲しいのは、その着物なんだけど分けてはくれないでしょうか」。そう言ったら顔色さっと変わったが、「まあ他ならん友人のあんたがそう言うのであれば、それを分けてあげましょう」と、承諾したので、私もいつも持つておった荷物の底へ入れて持つて歩いた宝物のその **seppa**、刀の鏢ですね、それを代わりに差し出して、そしてその着物はすぐに受け取って、その刀の鏢を相手へ渡して、その着物はまあ畳んで自分の荷物の中へしまいこんでしまった。

いろいろな話をしながらその夜はそこで泊まることになったので、その着物はしまってしまったし、そこの奥さんは、まあ後妻に入ってる奥さんだが、その奥さんはまあ「さあ、休みましょう」と、布団……、布団というか寝床をとってくれたのでそこへ寝た。

でもなんかその夕べ、その **cisinaot** という棺桶から話、棺桶の中から話されたので恐ろしくてよく眠れないし、そうしておるうちに、なんかその人影がさっと入ってきたような気配がした。そして、その夫婦の寝室近くへ行って垂れてあるごぎを、こうまくったの見た。そしたらその中で寝ておる私の友人である男が **orarpare** いわゆる息を引き取るようなその音が聞こえた。

そのまま恐ろしさのあまりガタガタ震えながら朝になってしまった。そしたら、そこの主婦である女が起きてご飯の支度いろいろ、起きたすぐに **puyar oriko** と言って窓を開けるのにも静かにあげるといふ、その歩き方でも上品さを描写されておりますが、その棺桶が夕べ来た。して、恐ろしさに夜も寝ないでおった。その翌朝のことなんだけど、そういう細かい描写もしてありますが、そんなことで、窓開けたりして火を焚いて、ご飯を炊いて、自分の夫を起こしたら、そこの主婦が起こしに行ったらば死んでおるものだから、まあアイヌ語で言う **pewtanke**、危急を知らず声を出して村中の人が集まってまあ葬式をした。

けれども、友人であるものを私も一緒に殺したような気して、非常に後味悪いので、出来るだけ丁寧に弔いをして、それから我が家へ帰ってきた。

そして妻にも話をしたら、「まあ仕方ないけれども本当に恐ろしいことだったね」と、話をして妻も泣いて悲しんだと。けれどもその後も別にどうって悪いこともないけれども、そのまま私は生活はしましたが、なんとなく後味の悪い思い出の一つでありました。と、**aynu**の男が語りました。

これは **uepeker** [散文説話] だな？

貝澤： **uepeker**\_だ、これ。

萱野： うん、 **uepeker**。 **cisinaot itak hawe a=nu** と。

貝澤： うん。

萱野： 「棺桶がしゃべった声を私は聞いた」という題ですね。